

# 「黄金のがちよう」と 笑わないお姫さま

早川 麻里

グリム童話の「黄金のがちよう」には、笑わないお姫さまが登場します。生まれてから一度も笑ったことのないこのお姫さまが、黄金のがちようにくつついた人たちの行列を見た途端に笑い出すのが、お話のハイライトになっています。

もともと、この黄金のがちようは、主人公の「抜作」が小人からもらったものでした。彼は三人兄弟

の末っ子で、「抜作」と呼ばれるとおり、いつも人にばかにされていますが、心の優しさは人一倍です。森で出会った小人に乞われて、自分の食べ物を惜しみなく分けてやると、小人がそのお札に「あの木をさりたおしてみなせえ、根のあいだに何かへえってますよ」と教えてくれるのです。そこで見つけた黄金のがちように、次々に人がくつついてしま

い、お姫さまを笑わせることになります。

三人兄弟（姉妹）の末っ子が、その親切さのために幸福をつかむのは、昔話によくみられるモチーフです。これが「黄金のがちよう」のお話のメインテーマであるとするれば、このお姫さまは、その幸福を象徴する脇役というところでしょうか。

ところで、このお姫さまは、いつたいなぜこれまで笑わなかったのでしょうか？ お話の中には、ごく簡単にしか語られていません。

王さまにはお姫さまが一人ありましたが、これはまたおそろしくむつりしたかたで、だれ一人このおひめさまを笑わせることができませんでした。それで、王さまは、もしもだれかお姫さまを笑わせるものがあつたら、おひめさまをその人のおよめさんにやる、という掟をこしらえておきました。

お姫さまが笑わないのは、ただ「おそろしくむつりした」性格だからだ、というのです。「だれ一人」彼女を笑わせることができなかつたというのですから、きつと、王さまやおつきのものたちは、なんとかしてお姫さまを笑わせたいと心を砕いたに違いありません。お城の道化役や、面白いと評判の見せ物や、思いつく限りのものが動員されたのではないのでしょうか。掟ができてからは、お姫さまと王国を自分のものにしようと、数多くの男たちが挑戦したはずで

でも、お姫さまは笑いませんでした。百年間の魔法がとけるまで、どんな王子をも受け入れることなく眠り続けたいばら姫のように……。もしかしたら、お姫さまを笑わせるべく用意されたものには、彼女をほんとうに笑わせる力はなかったのかもしれない。お姫さまにとっては、誰も思いつかないような、まったく意外なものが必要だったのです。おかしくって飛び出す笑いは、思いがけないことが起

きた時に、思わずこぼれ出るものではないでしょうか？

拔作が抱えた黄金のがちように、三人の娘、牧師さん、寺男、そしてお百姓が二人もくつついて、ぞろぞろ走り歩く様子など、お姫さまは想像してみたこともなかったでしょう。

お姫さまは、七人の人間があとへあとへとずるずるつながって駆けるのを見ると、ばかばかしい大きな声で笑いだして、どうしてもその哄笑おわらわいがとまりません。

固く閉められていた心の蓋がはじけとんだように、あとからあとから噴き出てくるお姫さまの笑い……。日本語には「山笑う」とか「花が笑む」という表現がありますが、寒い季節を耐えてきた木々が春に新芽を出し、固くしまっていたつぼみがほころぶ様子は、確かに「笑う」と表現するのがぴったり



かもしれません。お姫さまの心の中でも、固くこぼばつていたものがほぐれたのでしょうか。

ここで、当然、拔作はお姫さまを嫁にほしいと申し出ますが、王さまは同意しません。このお婿さんが気に入らず、なんとか遠ざけようとしています。いざお姫さまが笑ってしまうと、「拔作」などとあなどられている主人公に娘をやるのは惜しくなったのです。拔作は、あの小人に娘をやるのは惜しくなったので三つの難題をクリアし、最後にはめでたくお姫さまと結婚、王国をうけつぐことになりました。

こうしてみると、このお話は、心優しい末っ子が幸福をつかむ物語であると同時に、王権の交代の物語でもあります。笑わなかったお姫さまが笑っ

たのをきつかけに、王権が交代しているなんて、なかなか意味深長なことに思えてきます。

たとえば、お姫さまが笑わなかったのは、何らかの閉塞感をあらわしている、と考えてみてはどうでしょうか。お姫さまが、笑わないという行為を通して、父である王さまの政治や王国のありかたがどこか固苦しすぎる……ということが無言のうちに主張していたとしたら……？

この王さまがどんな人だったのかは、お話を読んでもあまりよくわかりません。特別に悪い政治をしていたわけでもないようです。ただ、お姫さまを笑わせることに關して掟を作ったり、抜作に新たな難題を課す様子が「いろんな口実いみわけをこしらえて」とか、「また新しい規則をこしらえました」と表現されているのが面白いと思います。国を統べるために様々な規則を作るのは王の大切な役割ですが、手前勝手な規則ばかりがエスカレートしていったら、周囲のものは息苦しくなります。

これに対して、この抜作の方は、世間一般でいわれる「頭の良さ」やずる賢さ、損得勘定とは無縁な、優しくお人好しな男です。お姫さまの笑いは、王国に新しい風を吹き込むために、王さまとは好対照な抜作を婿として呼び入れたのかもしれませんが。もちろん、「黄金のがちよう」の主人公はあくまでも抜作なのですが、あえて端役のお姫さまをクローズアップしてみると、こんなサイドストーリーが描けるのではないかと……と思うのです。笑わないお姫さまのもとに、抜作のような心優しい男を送りとどけたのは、実はお姫さまに対する小人の粋なはからいでもあったのかもしれませんが。

(会津大学)

\*文中の引用は金田鬼一訳『完訳グリム童話集(二)』(岩波文庫)からとりました。